

まえがき	iii
序章	1
I. 問題の所在	2
I.1. アカデミック・ハラスメントとは？	2
I.2. アカデミック・ハラスメントに関する先行知見	3
I.3. 本書の問題関心	6
II. 先行研究	12
II.1. 高等教育・研究者養成研究における位置づけ	12
II.2. 「ジェンダーと教育」研究における位置づけ	14
II.3. ジェンダー社会学を再考する研究群における位置づけ	16
III. 研究の目的・課題	24
IV. 研究の手法	26
IV.1. 構築主義の立場	26
IV.2. 領域交差の考え方	32
IV.3. 対象・表記について	41
V. 本書の構成	42
1章 社会問題としてのアカデミック・ハラスメント	57
1.1. 前史としてのキャンパス・セクシュアル・ハラスメント問題	57
1.1.1. セクシュアル・ハラスメント理論の形成・発展と日本への導入	58
1.1.2. キャンパス・セクシュアル・ハラスメントの問題化	60
：大学内部での抑圧を可視化するカウンター・ナラティブ	
1.2. 「アカデミック・ハラスメント問題」の誕生と展開	66
1.2.1. 「アカハラ問題」の誕生：新聞報道の整理から	66
1.2.2. カテゴリー解釈の変化：「上野解釈」から「ジェンダー非関与型解釈」へ	68
1.2.3. アカハラ裁判報道に見られる様々なカテゴリー解釈のレパートリー	70
1.2.4. 「ポスト構造主義的なジェンダー問題」とアカデミック・ハラスメント	74

小括	78	3.2.6. 行為遂行体としての学生を経験研究の中で読み解くための立ち位置	175
		：ド・セルトーの学生論とレディングスの学生論を切り結ぶ	
2章 大学問題とジェンダー研究に関する領域交差の理論検討	89	小括	180
2.1. 今日の大学におけるジェンダー研究の文脈化	89	4章 事例研究：学生のライフストーリー	189
2.1.1. フェミニズムの立場からの議論：語ることの困難とバックラッシュ	90	4.1. 調査の概要	189
2.1.2. 「第3の立場」とポスト歴史的な大学	94	4.1.1. 調査の手法	189
2.2. アカデミック・モビング研究からの示唆	101	4.1.2. 調査の対象者	191
2.2.1. 大学における大人のいじめ	101	4.1.3. 表記と匿名化・加工の基準および原稿公開の承諾取得について	193
2.2.2. ウェストヒューズによるリチャードソン・ケース分析	103	4.2. マリさんのストーリー	194
2.2.3. 「説明義務」と「会計」の分離、保守回帰に陥らないバランス	105	4.2.1. 「アカハラ」と認識された中心的出来事：「ゴースト実験者」	195
2.3. 「性と生をめぐる政治」を大学の中で語る／語れるということ	109	4.2.2.A 教授の変化を感じる：研究的・教育的関与の低下	196
：「欲望」の問題系		4.2.3. ほかの学生との関係：研究室内の扱いにおける不平等	197
2.3.1. 第4の論点：アカデミズム内部の抑圧について語る	110	4.2.4. 「学内政治」と学生：教員によって利用される学生という認識の構図	198
2.3.2.1つの切り口として：「加害者」ギャロップの主張	113	4.2.5. 新たな「被害」の発見：補佐業務への謝金不払い・推薦書への不満	199
2.3.3. 「欲望」問題と人権問題をアカデミズムの内部で語る①	116	4.2.6. 考察：相互行為としてのインタビューと分析・解釈の過程	201
2.3.4. 「欲望」問題と人権問題をアカデミズムの内部で語る②	123	4.3. ヒロキさんのストーリー	206
小括	135	4.3.1. 「厳しい指導」の意義と価値：研究とは何かを教えてくれたF先生	207
3章 教員—学生関係に関する領域交差の理論検討	149	4.3.2. 「ここにはいられない」と思わせたこと：先輩への「アカハラ」	209
3.1. 被害—加害の枠組み：「でも、それだけじゃない」にどう向き合うか？	150	4.3.3. 「アカハラ」と「非アカハラ」の線引き：研究者として正しいか	211
3.1.1. 権力、権威、差別の重なりと相違	153	4.3.4. 過酷な研究環境としての「トラウマ」：「燃え尽き」と「ボイコット」	214
3.1.2. リベラルで非権威的だがエクセレントではない教員	155	4.3.5. 「一方的に教わる」一対一の関係から「自分で学ぶ」チーム環境へ	216
：ポスト歴史的大学で「変人であること」はどのように論じられるのか		：対照的なG研究室を選んだ「自立的」選択	
3.2. 「教える—教えられる」関係と、学生の営みを読む視角	159	4.3.6. 考察：相互行為としてのインタビューと分析・解釈の過程	218
3.2.1. 「教える—教えられる」関係における非対称をめぐる議論のマッピング	160	4.4. アユミさんのストーリー	224
3.2.2. 「教える—教えられる」関係についての議論①	162	4.4.1. 理想的な関係から突然の関係悪化：「蜜月」と呼ばれる期間の終わり	225
：生産性と満足度両立の工学的プランニングと研究室運営論		4.4.2. 「蜜月」の行間：肯定の喜びと押し付けのプレッシャーの狭間で	227
3.2.3. 「教える—教えられる」関係についての議論②	165	4.4.3. 「戸惑い」：「体を為していないゼミ」と「学生のため」という名分	230
：社会的勢力論、教育上の支配従属関係論		4.4.4. 恐怖：「独特の空気感」による緊張	233
3.2.4. 「教える—教えられる」関係についての議論③	167	4.4.5. 批判的理解の言語化：院生Iとの対話	235
：ペダゴジーのジレンマと主体形成をめぐる議論		4.4.6. 学生—教員間の不適切な「距離」：「使える／使えない」という指標	238
3.2.5. ポスト構造主義の主体≠行為遂行体形成論と、抵抗の契機という視点	172	4.4.7. 「マインド・コントロール」と認識されたこと：「教育愛」の僭称	241

4.4.8. 考察：相互行為としてのインタビューと分析・解釈の過程	243	5.2.1. 方法論上の課題・限界	326
4.5. コウスケさんのストーリー	253	5.2.2. 専門領域特性①：「アーツ的」領域に特有の文脈	328
4.5.1.K 教授とのトラブル：共同翻訳クレジットの搾取	254	5.2.3. 専門領域特性②：「サイエンス的」領域に特有の文脈	332
4.5.2. 「対話」と「非暴力」を議論する教員—学生間での対話の困難と失望	256	5.2.4. 組織特性：公的制度としての「講座制」、経験される「講座制的な運営」	335
：「僕は再生産しない」と宣言されたこと		5.2.5. 「ジェンダー化された背景文脈」の再考	337
4.5.3. 「支配的な」関係と「師弟関係にとらわれない」関係の分類理解	259	：問題経験の結節点としてではなく一視点として	
4.5.4. 双方向でコヴィナントな教員—学生関係：「距離」のある関係	262	5.2.6. 問題経験の背景文脈に関する今後の理論研究・実証研究に向けて	341
4.5.5. 教員の影響力と関係構築上の困難	266	5.3. 領域交差と対話的構築主義アプローチ	342
4.5.6. 先輩との人間関係構築の中で乗り越えた教員—学生関係の「困難」	268	5.3.1. ある対象者の「説明的」語りについての一考察	343
：相対化とオリジナリティの確立		5.3.2. ライフの総体の中で再び浮かび上がるジェンダーの視点：切り分けへの異議	348
4.5.7. 考察：相互行為としてのインタビューと分析・解釈の過程	270	5.3.3. ポスト歴史的大学における「学生の抵抗」	356
4.6. タケオさんのストーリー	274	小括	360
4.6.1. 「全人格的に支配される」がハラスメントではない指導①	276	終章	371
：全面的に肯定・継承される「芸風」		6.1. 本書で行った作業と得られた知見	372
4.6.2. 「全人格的に支配される」がハラスメントではない指導②	278	6.2. 残された課題と各領域における示唆	375
：時代の変化の中で修正される「芸風」		6.2.1. 高等教育・研究者養成研究における位置づけ	377
4.6.3. 「支配の網」にかからない「学生」の役割	280	6.2.2. 「ジェンダーと教育」研究における位置づけ	378
：「変化する時代」の人文社会科学系研究室教育		6.2.3. ジェンダー社会学を再考する研究群における位置づけ	380
4.6.4. 教員の立場から見る「学生の困難」	285	6.3. 総括：今後の展望	384
：P 教授の教えの修正的模倣・再現としての教育活動		6.3.1. 社会学／社会学の「／」への注視：複数形での語り	384
4.6.5. 考察：相互行為としてのインタビューと分析・解釈の過程	289	6.3.2. エクセレンスの論理／大学の抵抗の「／」への注視	387
小括	294	：「説明義務」の問いを生み出す教員と学生の新しいつながり方へ	
補節 留学生の経験：自然科学系男性のケースから	295	文献	395
5 章 事例横断分析：アカデミック・ハラスメントと「学生の抵抗」	305	あとがき	419
5.1. 学生の主観的意味世界におけるアカデミック・ハラスメントの形成過程	306	索引	423
5.1.1. 「距離」に関する不満・不快	306		
5.1.2. 「利用されている」感覚	310		
5.1.3. 「研究者としての尊敬」が喪失・低下すること	318		
5.1.4. 関係性としてのアカデミック・ハラスメント	320		
5.1.5. 「不同意」のプロセスとしての教員—学生の今日的つながり	322		
5.2. 主観的意味世界から析出された背景文脈：補足的考察	326		